

札幌の都市軸となった慶応2年のインフラ「大友堀」

—亀太郎の精神と「札幌黄」の隆盛

■概要

札幌の開発は、明治2年（1869年）に開拓判官・島義勇が札幌本府建設に着手した時が始まりと思われがちですが、そうではありません。島が札幌の南北軸とした「大友堀」は、慶応2年（1866年）に、箱館奉行の直営農場のための用排水路として大友亀太郎によって開鑿されたもの。幕末のインフラは、後に札幌産タマネギ「札幌黄」の生産にもつながりました。「大友堀」の痕跡をたどると、古河川の水脈が見えてくるとともに、数々の文化財や古刹、札幌村郷土記念館で昔の札幌に出合えます。

■ストーリー

「大友堀」の名は、幕府の役人だった大友亀太郎に由来し、後世の人がそう呼ぶようになりました。亀太郎は二宮尊徳の門下生で、報徳仕法と呼ばれた農村復興政策を学び、蝦夷地に渡ります。そして箱館奉行から直営農場である御手作場をつくることを命じられ、慶応2年（1866年）、現在の札幌市東区を適地とし、用排水路の開鑿に着手しました。これは豊平川の分流を水源として、南3条付近から北6条へ北上し、そこから東北方向に伸ばしてフシコサツホロ川に合流させるというもので、約4kmに及ぶ工事は「百万両の大工事」と称されました。明治2年（1869年）、開拓判官・島義勇が札幌本府の建設に着手した際、そこには既に幕府の遺産である「大友堀」が存在していたのです。その後、「大友堀」は物資輸送の舟運ルートとしても大きな役割を果たします。

島の後任の岩村通俊判官は東西に走る後志通（現・大通）の広い緑地帯を基線にして、北を官庁街、南を商店・住宅街とし、「大友堀」によって街を東西に分けました。そして60間四方を一区画とする碁盤の目が、札幌の基盤となります。



大友亀太郎



大友堀

幕末から開発が始まり、御手作場が設けられた地域は札幌村、元村と呼ばれました。その地割は今も残っており、家並みや地図に御手作場の痕跡を見ることができます。また、北6条からかつて御手作場の役宅のあった札幌村郷土記念館までは、碁盤の目の札幌では珍しい斜めの道が走っています。

明治3年(1870年)、「大友堀」の北6条から北の旧琴似川の合流点に「寺尾堀」が、「大友堀」の南3条から南6条に「吉田堀」が開鑿されて「大友堀」は南北に延伸されました。明治4年(1871年)、「大友堀」にかかる橋を岩村が創成橋と名づけたことで明治7年(1874年)、「大友堀」は創成川そうせいがわとなりました。



創成川

農家の人々は、お雇い外国人ブルックスの指導を受けながらタマネギ栽培に努力し、明治13年(1880年)頃、札幌村では西洋野菜のタマネギ栽培に成功しました。「札幌黄」という品種のタマネギは、炭鉱や船積み食料として重宝され、ロシアへも盛んに輸出されました。

人々が収穫に感謝して丘珠神社おかだまじんじゃに奉納した獅子舞ししまいは、今も札幌市無形文化財第一号の丘珠獅子舞としてしっかりと受け継がれています。

御手作場や札幌黄に関する資料が展示されている札幌村郷土記念館、亀太郎ゆかりの妙見堂みょうけんどうを擁する本龍寺ほんりゅうじ、道内最大の山門を擁する大覚寺だいがくじなどが点在するななめ通り周辺。それは幕末から開発が始まっていた札幌の開拓期の名残りを追体験できる場所に他なりません。



妙見山 本龍寺